

高槻市文化財調査報告書 第4冊

# 塚原古墳群の研究(I)

—塚原37号墳・塚原38号墳・塚原85号墳調査報告—

1968

高槻市教育委員会

## 序

このたび、『高槻市文化財調査報告書』第4冊として、塚原古墳群の調査報告の一部を刊行することになりました。

塚原の「八十塚」の名で親しまれてきた塚原古墳群は、明治年間にイギリス人ウィリアム・ゴーランドによって世界にも紹介されました。また、古墳時代後期の横穴式石室をもった古墳が100基前後群集するところとして、学界でも注目されてきたところです。

ところが、本市の急激な発展とともに、開発の歟が塚原にも迫ってきました。開墾や宅地造成で大半を破壊された一部の古墳も消滅しようとしていました。そこで、そういう状態にあった、三島土地株式会社用地内の古墳について、1962年の冬に発掘調査を行ない、記録にとどめました。こん間、1962年に調査しました5基の古墳のうち3基について、整理が完了したので報告することになった次第です。その後も、住友化学中央研究所建設に伴って緊急調査を行ないました。いずれ、それらに関する調査報告や、研究成果の一端も継続して発刊していきたいと思います。

ここに、発掘調査のために、ご苦労いただきました関係各位に対して、深く感謝の意を表しまして、発刊の序といたします。

1968年3月

高槻市教育委員会教育長 入谷唯一郎

## 例　　言

1. 本書は、高槻市大字塚原に所在する塚原古墳群において、1962年冬に行なった5基の横穴式石室に関する第1次調査のうち、整理の完了した3基の石室の調査報告であります。第1次調査の残余の2基をはじめ、第2次・第3次調査の報告や、研究成果は追って継続的に刊行する予定であります。
2. 塚原37・38・85号墳の発掘は、1962年冬に、高槻市教育委員会が、消滅寸前の古墳に対する記録と、市史編纂事業の一環として、成蹊女子短大教授天野高信氏を調査担当者に、大阪府立島上高校教諭根津哲夫氏を調査指導者として、立命館大学・同志社大学・大阪府立島上高校・箕面自由学園の学生・生徒諸氏のご協力を得て行なったものであり、出土品の整理と本書の執筆は、奈良国立文化財研究所技官西谷正氏が担当されました。
3. 塚原古墳群の調査、整理ならびに本書の編集にあたり、格別の協力と援助をよせられた関係者のご厚意に対して感謝の意を表します。

1968年3月

高槻市教育委員会社会教育課課長 新出昭治

## 目 次

### 塚原古墳群の研究(I)

—塚原37号墳・塚原38号墳・塚原85号墳調査報告—

西 谷 正

第 1 章 調査の経過.....	1
第 2 章 塚原古墳群の位置と構成.....	6
第 3 章 塚原37号墳の調査.....	10
第 4 章 塚原38号墳の調査.....	13
第 5 章 塚原85号墳の調査.....	14

## 図版目次

六二二五二

図版第 1	(1) 塚原古墳群航空写真	6
図版第 2	(1) 塚原古墳群の西方からの遠景（西谷正撮影）	6
	(2) 塚原古墳群の東南方からの遠景（西谷撮影）	6
図版第 3	(1) 塚原37号墳入口から見た石室全景（西谷撮影）	10
	(2) 塚原37号墳奥壁から見た石室全景（西谷撮影）	11
図版第 4	(1) 塚原38号墳の位置（西谷撮影）	13
	(2) 塚原38号墳石室全景（西谷撮影）	13
図版第 5	(1) 塚原85号墳入口から見た石室全景（西谷撮影）	14
	(2) 塚原85号墳奥壁から見た石室全景（西谷撮影）	15
図版第 6	(1) 塚原85号墳遺物鉄釘・鉄刀子・銀環（仙幹雄撮影）	16
	(2) 塚原85号墳遺物須恵器・土師器（仙幹雄撮影）	17

## 挿図目次

第 1 図	塚原古墳群の位置（二万五千分の一「高橋」図幅分載）	7
第 2 図	塚原古墳群分布図（大阪府製作地図による）	8
第 3 図	開墾地域古墳分布図（西谷・奥山哲通・寺田貞大実測、西谷製図）	9
第 4 図	塚原37号墳石室実測図（村上祐揚・熊野種実測、西谷製図）	10
第 5 図	第1次調査区分布図（田代克己・奥田・岡本俊英・藤原典司実測、西谷製図）	12
第 6 図	塚原38号墳石室実測図（田代・伊藤久嗣等実測、西谷製図）	13
第 7 図	塚原85号墳石室実測図（西谷・梶崎貞大実測、西谷製図）	14
第 8 図	塚原85号墳遺物出土状況実測図（西谷実測製図）	15
第 9 図	塚原85号墳閉塞石・遺物出土状況（西谷撮影）	16
第 10 図	塚原85号墳鐵器実測図（西谷実測製図）	16
第 11 図	塚原85号墳土器実測図（西谷実測製図）	17

## 第1章 調査の経過

### 既往の調査

塚原古墳群が世間に知られるようになったのは、かなり古いことである。それは、1872（明治5）年に、大阪造幣局の技師として招請され、その余暇に、各地の古墳を科学的に調査し、明治期の考古学史の一頁を飾ったWilliam Gowlandの紹介にはじまる。彼の著した“*The Dolmens and Burial Mounds in Japan*”によると、Dolmenの構造を説明するなかで、塚原古墳群の一横穴式石室の規模が測定され、また、Dolmenの内部として、<sup>①</sup>塚原の横穴式石室内部の写真が紹介されている。同じ著書のなかで、Yaso-dzukaという地名をもちながら、ただ15基しか残っていないのは、多くが破壊されたものであろうと推定しているところをみると、Gowlandの調査が、現在「八十塚」の碑が立っているところで、塚原古墳群としては中心部の一部が調査されたのにとどまると想像される。しかし、そこでは、巨石文化遺跡の挿図として、塚原古墳群が挿入されただけで、くわしい調査はほとんど行なわれなかったようである。

坪井正五郎博士は、阿武山の南麓に古墳が多いことは、塚原という地名から推定されるという点に注意して、地名と遺跡との関係を考察したことがある。

塚原古墳群を、学問的な立場から大きく取り上げたのは、浜津の古墳墓を網羅的に調査していた梅原末治博士である。すなわち、墳墓形式に、円墳以外に方墳や反墓があること、また、なかには異形埴輪があって、いくつかの形式を含んでいることなどから、近畿の群集墳<sup>②</sup>としては異例であるとして、現状の詳細な観察を行なっている。

その後、戦後になって、経済復興とともに、遺跡の破壊も進む気配もあったので、大阪府教育委員会では、万-に備えて、府下の主要古墳の測量調査を計画したが、ます、昭和27年度に塚原古墳群の測量を行なった。測量は、小林行雄博士が指導して、京都大学文学部考古学教室員によって行なわれた。<sup>③</sup>そして、やがてまもなく、塚原古墳群の中を東西に走る道路の南側の古墳密集地域のうち西半部が、東半部を保存することを条件として、開墾されることになった。その測量の成果は、まだ、大阪府教育委員会から公表されていないが、西半部がほとんど消滅した現状では、貴重な資料となっている。

こうした行政的な調査とは別に、永年、三島地方の考古学的調査・研究に蘊蓄を傾けてこられた茨木市文化財調査委員の免山篤氏は、塚原58号墳について清掃を行ない、その時の觀

察記録を報告している。そこでは、横穴式石室の構造が明らかにされ、埴輪を伴出することも指摘された。<sup>④</sup>

こうして、後期の横穴式石室を包蔵する古墳が群集するところとして、著名になつてはきた。ところが、ここ数年ほどの間の、高度成長政策に伴なう大規模な開発の波が、この塚原とした塚原を、住宅地として、あるいはまた、工場用地としての姿に変貌させていく結果を導いたものである。このようにして、1962年から1964年までの3年間に、4次にわたる破壊に先駆事前調査を行なつたのである。本書では、第1次調査のうち、3基の横穴式石室に關して調査報告を行なうものである。

**第1次発掘調査** 塚原から安威に通じる道路に面した北側は、三島土地株式会社の宅地となつていて、土取りや石材採取のため、円墳群はすでに多数が破壊されていた。そのうち、塚原39号墳は、封土の大半と横穴式石室の天井石・側壁上半部を失ない、内部が露出して、消滅寸前の状況にあった。そこで、内部を精査して記録をとるという、行政的処置をとることになった。また、塚原古墳群に対する本格的な学術調査は皆無に等しく、横穴式石室の構造・埋葬状況・年代比定など、市史編纂の立場からも追求を行なつた。あわせて、高校生や一般市民の参加もえて、郷土史を体験的に学ぶ機会を提供しようと心がけた。

発掘調査は、塚原39号墳を中心として、塚原36号墳・塚原37号墳・塚原85号墳の内部清掃と、三島土地株式会社用地内の現状の全貌を把握した。

1962年1月12日、高槻市教育委員会社会教育係の新出昭治係長・山下歎、高槻市史編纂委員会の西谷正が現状を視察して、協議した結果、2月1日に、発掘調査を行なうこととに決定した。ただちに、埋蔵文化財発掘調査届出書類の作成に着手し、調査団の編成にとりかかった。3月2日には、文部省文化財保護委員会から発掘の許可書が到着し、また、調査資材の集結も終了、調査の開始を待つばかりとなつた。

調査は、下記の調査員延105.5人と、別記する大阪府立島上高校生と箕面自由学園中学生延118人の実働をもって行なつた。経費は全額高槻市費54,745円をもって充当した。<sup>⑤</sup>

**指導者** 成蹊女子短大教授 天野高信 大阪府立島上高校教諭 根津哲夫

**調査員** 高槻市史編纂委員会 西谷 正 立命館大学人文学部学生 喜谷美宣

立命館大学学生 村上紘揚 同 福村忠雄

同 熊野 横 同志社大学学生 田代克己

同 伊藤久嗣 同 梶崎貞夫

なお、調査の期間中、資材の置場や借用、さらに湯茶の接待などで世話をなつた岸田喜

久治氏、宿舎にあてられた浜津峠少年の家の高谷勘次郎氏のご厚意に感謝を捧げたい。

以下、調査の進行状況を日誌によってみることにする。

- 3月5日 晴。簡単な慰靈祭の後、現状の写真撮影。午前中に落石の搬出。午後、側壁の平面輪郭を求めて掘り下げる。東側に穴を認める。漢道部では早くも須恵器・土師器を発見。
- 3月6日 小雨。両袖形式であることが判明。内部の発掘の進行とともに、玄室で須恵器・鉄器などを検出し、底部に近いことが推定される。
- 3月7日 曇のち雨。石室外周部を清掃して、プランを明確にする。漢道部で追葬と思われる遺物群を露呈。
- 3月8日 晴。塚原39号墳玄室内を清掃。底部の礫敷と遺物を検出。警備のため、本日より夜営を行なう。
- 調査員の一部をさして、塚原36号墳・塚原37号墳の清掃を開始。
- 3月9日 曇のち雨。塚原39号墳は石室内を清掃。塚原36号墳は清掃を続行。
- 3月10日 晴。塚原39号墳は石室内外の清掃を終わり、正午には写真撮影。午後、遺物実測のための割りつけを行なう。午前中に、塚原36号墳の清掃も続ける。
- 3月11日 晴。塚原39号墳遺物出土状況実測開始。塚原37号墳石室の側面・断面・平面を実測。塚原36号墳石室内底部清掃。あわせて、塚原85号墳の清掃にも着手。
- 3月12日 晴。塚原39号墳遺物の実測を終わり、取り上げる。塚原36号墳は正午に写真撮影を行ない、遺物を実測。塚原85号墳は清掃と遺物の検出を行なう。
- 3月13日 晴。塚原85号墳は清掃の後、写真撮影と遺物出土状況の実測を行なう。夕刻には、遺物を取り上げる。塚原36号墳も遺物出土状況を実測し、取り上げる。本日をもって夜営はとく。
- 3月14日 晴。塚原36号墳石室の割りつけと実測、塚原85号墳の掘り方の追求を行なう。塚原39号墳では、礫敷を除去すると、下から須恵器・鉄器を発見し、玄室内での2回以上の埋葬を認める。
- 3月15日 晴。出土した須恵器・土師器を洗浄。
- 3月16日 晴。塚原39号墳玄室底面の清掃、写真撮影、および、実測を終えて、遺物をとりあげる。あわせて、石室の掘り方を追査。塚原36号墳石室の側壁を実測。塚原85号墳は、清掃後、写真撮影。午後、割りつけを行なって実測を開始。
- 3月17日 晴。塚原36号墳石室奥壁など実測。写真撮影も行なう。塚原39号墳では、掘り方を

追求し、ほぼ全容がわかる。墳丘外縁を把握する目的で、レンチを設定。

- 3月18日 晴。塚原85号墳の石室の実測を完了。塚原39号墳では、石室の掘り方を検出する。墳丘外縁のトレンチでは、北・西・西南において溝を認める。塚原遺跡の遠景撮影。
- 3月19日 晴。塚原39号墳墳丘西南部の約1/4の範囲を印地表の面まで露呈。墳丘外縁北東部のトレンチでも、溝を認める。
- 3月20日 雨。塚原39号墳墳丘北東部トレンチ内でも溝を検出し、この古墳が円墳であったことを確認。石室を内外にわたって清掃し、全景を写真撮影。実測用割りつけを開始。
- 3月21日 雨時々晴。塚原39号墳石室実測を開始。
- 3月22日 晴。塚原39号墳の実測を続行。午後、反省会。
- 3月23日 晴時々小雨。塚原39号墳石室および墳丘断面の実測を終了。塚原36号墳～塚原39号墳・塚原85号墳の分布状況の約60%平面図の作成。  
岸田喜久治氏宅出土遺物を展示して、塚原地区住民に紹介。
- 3月24日 備一時雨。墳丘田地表・溝および全量の写真撮影をもって、調査を終了。
- その後、4月1日に調査団の反省会と総括を行ない、4月28日の「高槻の文化財を守る会」の総会において、「塚原古墳群調査報告」と題する講演を行なった。出土遺物は、高槻市教育研究所に搬入し、整理を行なった。

第1次発掘調査の対象は、半壊ないし全壊に近い状態を示していたが、後に調査報告するような成果が得られた。その結果、塚原群集墳の重要性が痛感されるとともに、第1次調査が群集墳全体の5%に満たない部分を明らかにしたにすぎず、こんごの調査の続行と現状以上に破壊が進まないことが期待されたのであった。<sup>①</sup>

なお、塚原85号墳の小形横穴式石室は、大阪府立島上高校地質部員によって、同校校庭に移築され、秋の文化祭には公開された。

注 ① William Gowland : The Dolmens and Burial Mounds in Japan , (Archaeologia , Vol.55) 1897. London . このなかで、塚原に關係のあるところを抜粋しておこう。

"Fig. 5 represents the interior of a dolmen at Tsukahara (Settsu) (Table I. A698). The chamber measures 14feet 8 inches long , 5 feet wide , and 7 feet high , and is entered through a gallery 11feet long . It is built entirely of more or less weathered boulders , and , although of Class II. , represents accurately the structure of the rude forms of Class I. The convergence of the walls towards the roof

is well seen in this example. It is covered by a simple conical mounds" (Fig. 5. Interior of Dolmen at Tsukahara (Settsu)) (pp. 446~447)

..... "One which I found near Taukahara (Settsu) was of an elongated boehive shape, simply because rolled stones from the bed of the adjacent river were used for its walls, and this was the easiest from to construct with them. (p. 449)

"In every province there is abundant evidence that very many have been destroyed and the geographical names of some of the dolmen districts testify to this, thus we have Yaso - dzuka (the eighty mounds) where only fifteen remain, Sen-dzuka<sup>2</sup> (1000mounds or "great many") where there are now only about forty.

( p. 509 )

TABLE I - DIMENSIONS, ETC., OF JAPANESE DOLMENS

No.	Locality	Chamber			Gallery			Total	Direc- tion of Entr- ance	Mound	Notes					
		L.	Br.	H.	L.	Br.	H.									
97	PROV. SETTSU Tsukahara	ft.	in.	ft.	in.	ft.	in.	ft.	in.	S. E.	Simple conical	Built of small bou- lders.				
98	Do.	11	3	6	8	7	5	Do.	2	6	-	Gallery in line with E wall.				
99	Do.	14	8	5	0	7	0	11	0	3	2	5	625	S. 5°	Do.	W.
100	Do.	14	8	4	5	6	8	2	10	3	4	4	217	S. 23°	Do.	W.
														Gallery in line with chamber roof of five stones.		
														Gallery in line with W. wall of chamber.		

(p. 519)

- ② 梅原来治「塙原の群集墳と福井の海北塚（津津古墳墓統編1）」（『考古学雑誌』第8卷第2号、pp. 1~9）1917。

③ 小林行雄「主要古墳の測量調査」（『大阪府の文化財』p. 150）1962。

④ 免山篤「津津岡塙原の一石室調査報告」（『古代学研究』第4号、pp. 25~28）1951。

⑤ 大阪府立島上高校地歴部員 上浦良造、岡本俊英、奥田哲通、中村時子、長谷川勉、野口洋志、小松美智子、新関佐伎子、奥田澄子、藤原興司、石橋貞子、寺田紀代子、西田武、鈴木可一、寺田貞夫、富成哲也、今泉泰通、真田季代、藤野ひろみ、川嶋昭美  
箕面自由学園生徒 許憲榮、福盛和雄、植木哲夫

⑥ 第1次調査の概要是、西谷正「大阪府高槻市塙原古墳群」（『日本考古学年報』15、昭和37年度、pp. 167~168、1967）を参照されたい。

## 第2章 塚原古墳群の位置と構成（図版第1・2）

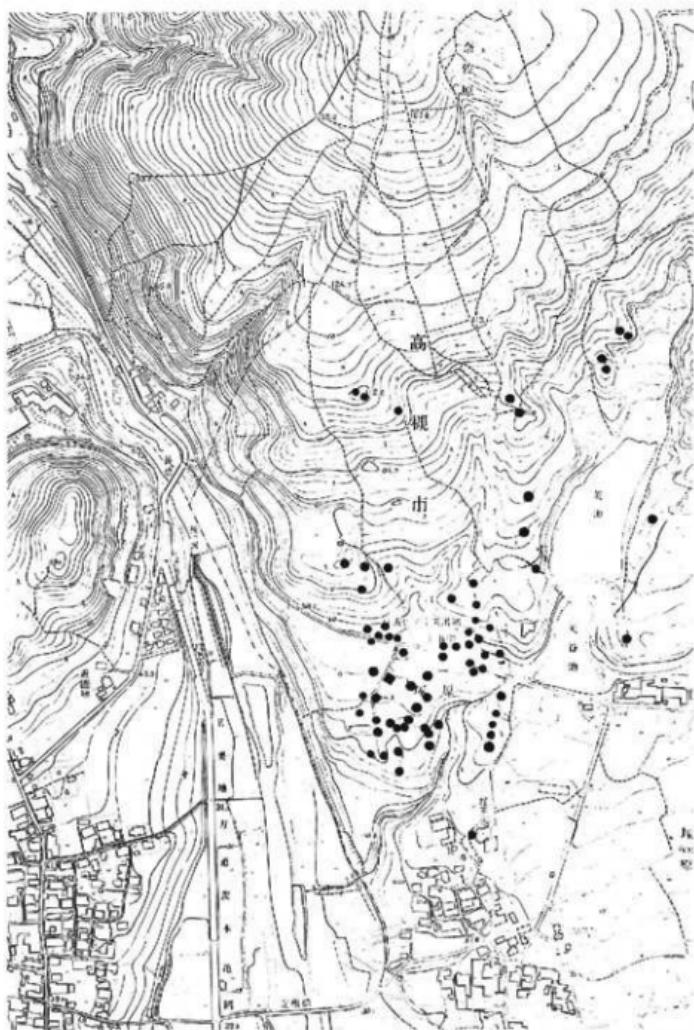
塚原古墳群の所在する地域は、大阪府高槻市大字塚原の地籍に属している（第1図）。塚原という地名が、塚の多い台地という意味をもち、「塚原八十塚」という名で知られてきたところである。摂津・丹波にまたがり、老坂山脈を形成する一山塊に、標高281.1mの阿武山がある。その中腹の、標高214mの支丘には、白蓮の塔として親しまれてきた京都大学防災研究所付属阿武山地震観測所がそびえる。この地震観測所建設工事が行なわれた1934年（昭和9）には、実紹館を蔵した横穴式石室が発見され、終末期の古墳として注目された。この付近から標高50m位の山麓にかけて、数多くの後期古墳が分布している。阿武山から緩やかな傾斜をなして降りてくる山腹が、平坦な台地へと移る傾斜変換線には、塚原から茨木市桑原および安威へと通じる道路が東西に走る。また、この台地の南側は一段と低くなり、その麓に塚原の集落がある。この集落のある台地はしばらく南へと続き、茶臼山古墳（伝體天皇陵）の立地する台地との間に、水田を介在させている。塚原の西、安威との間には安威川が流れ、それが形成する扇状地は、豊かな穀倉地帯である。

塚原には、さきの道路の周辺、地質学上の、砂砾と粘土からなる中低位段丘疊層（後期洪積層）には、無土器文化に属する石器が発見される。<sup>②</sup> 織文文化では、石棒の出土が伝えられ、また、僅かながら石鏽や晚期の土器も発見している。さらに、弥生文化にいたっても、中期および後期の土器や、石庖丁・石鏽などを検出している。古墳時代にはいると、塚原53号墳の南方、岸田隆行氏邸敷地内から、後漢鏡の流雲紋縁の一部分が免山篤氏によって採集されている。また、ここから谷を一つ隔てた民家が数軒道路に沿って東西に並んでいる背後の丘陵からは、西田彦一氏によって丁字頭の硬玉製勾玉1個が拾取されている。さらに、日赤病院構内からは、かって、三角縁三神三獣鏡が発掘され、現在、東京国立博物館に収蔵されている。

塚原古墳群（第2図）は、狹義にみると、塚原の集落の東北の端にある教王寺境内の横穴式石室墳を南限として、さきの東西に走る道路を中心としたところにもっとも濃密に点在している。道路の北側の傾斜面では約27基の横穴式石室墳を確認している。地震観測所の南に近接する小グループと、中腹に数基が群集する小グループを除くと、大部分、道路際の傾斜面に密集している。この一群は、谷間によって、さらに東西の2つのグループに細分すること



第1図 塚原古墳群の位置（縮尺1／25000）



第2図 塚原古墳群分布図（縮尺1／6000）

とができる。道路の南側は、便宜上、開墾され破壊された地区（第3図）と、松林のなかに比較的よく保存されている地区とに分けている。後者の地区には、空塗をもつ方墳や、双円墳なども含んでいる。また、広義に塚原古墳群という場合には、前述の郡集墳の東方、谷間を一つ隔てた丘陵地にある数基の円墳をはじめ、さらに、もう一つの谷間を隔てた日赤阿武山病院のある丘陵地に分布する10数基をも含めている。

注 ① 四手井晴子・田代克己・西谷正「大阪府高槻市塚原遺跡発見の石器について」（『古代学研究』第39号、pp.

1~5）1964。

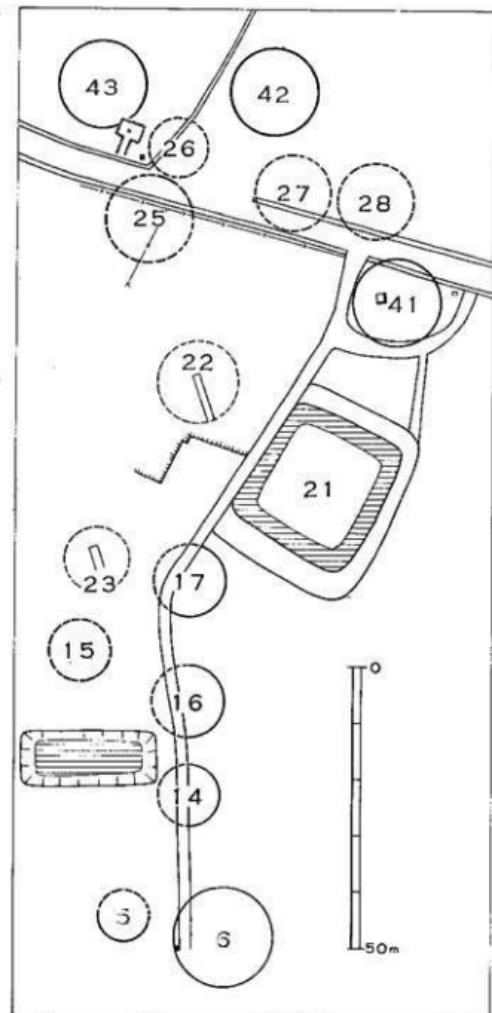
② 梅原末治「摂津阿武

山古墓調査報告」

（『大阪府史讀名勝天

然紀念物調査報告』第

7編）1936。

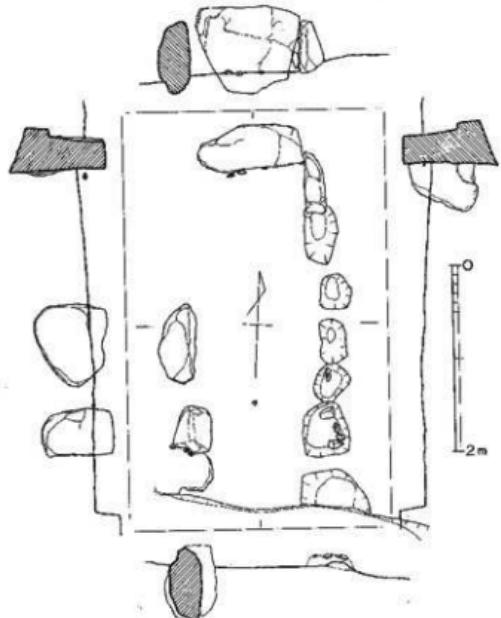


第3図 開墾地域古墳分布図（縮尺1/5000）

### 第3章 塚原37号墳の調査〔図版第3〕

第1次調査区（第4図）のうち、塚原37号墳は、ゆるやかな傾斜面につくられたと考えられるが、開墾などによって周囲が大きく平夷されているため、旧地形と石室との関係や、墳丘の構造は明らかにすることはできない。

内部主体は横穴式石室で、片袖形式と推定する（第5図）。入口は南に開口しているが、西へぞふっている。石室の破壊はきわめてひどく、最下段の石が4個残っているにすぎない。すなわち、奥壁1個、東側壁1個、西側壁1個、そして、西玄門1個である。奥壁に使用した石材は、切石のような稜角や面をもつものである。西玄門石材は、小形であるが縦長のもので、玄門の名にふさわしい。東側の側壁は、奥壁に接するところで、1石しか残っていない



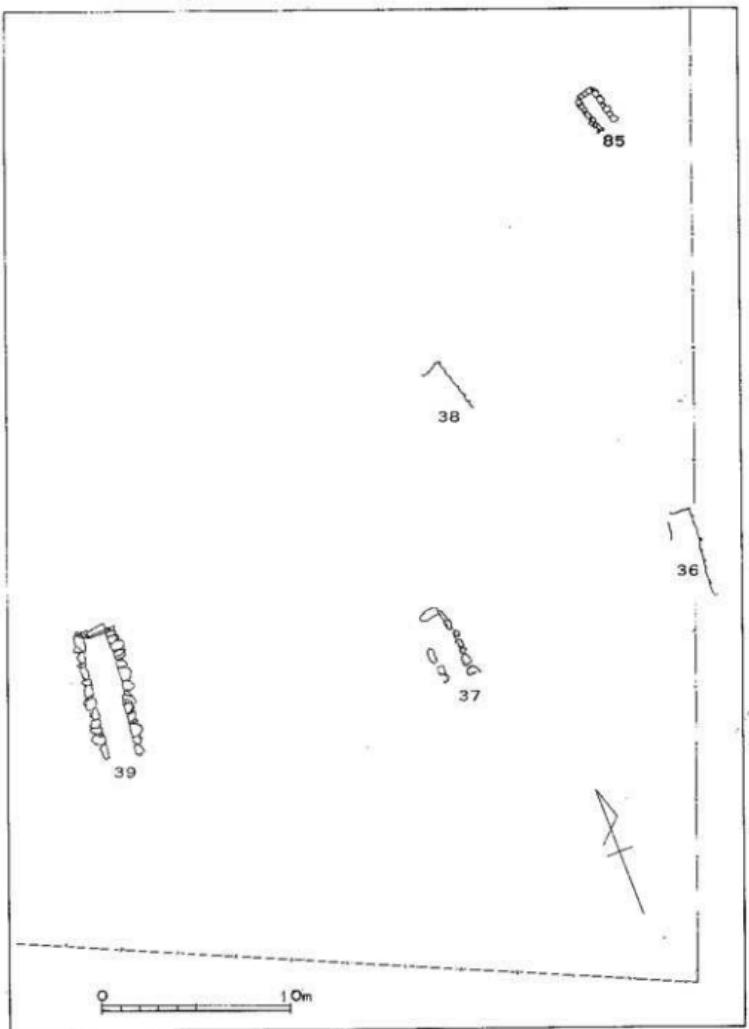
第4図 塚原37号墳石室実測図（縮尺1/60）

かったが、その南側から葬道に向って、6石分の抜き跡を検出した。そのうちの2箇所では、根石も遺存していた。西側玄門石に対する東側玄門部は、玄室の東側側壁とは一直線上にのり、したがって、袖がなかったことを推定することができた。これによると、玄室部の最下段は5石から構成されていたことが明らかである。玄室東側石抜き跡の玄門より、3個

所は凹部が東に寄っているが、これは石材の底部が平らでなく、東側に突起していたと考える。わずかに残存していた最下段の側壁と、抜き跡の状況から判断すると、石室の規模は、全長3.76m以上、うち玄室長2.56m、狭道長1.2m以上、玄室幅1.2m、狭道幅1mである。石室底面には敷石の遺存がなかった。

遺物は、玄室南端の中央で、鉄片と須恵器片が出土した。形式は不明である。

年代については、多少とも石材を切っている点で、7世紀に入いるものかもしれないが確かではない。



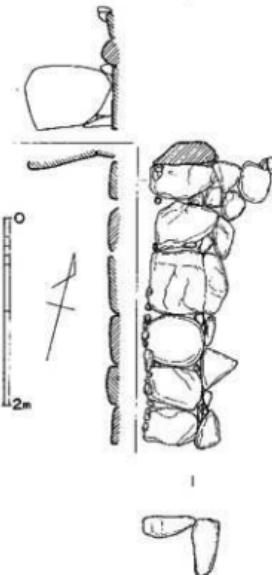
第5図 第1次調査区分布図（縮尺1/300）

## 第4章 塚原38号墳の調査 (図版第4)

塚原38号墳は、傾斜変換線に近い、ゆるやかな傾斜面につくられている。早くからの開墾によって、横穴式石室の一部を残すにすぎず、墳丘の状況は不明である。

第1次調査の際、塚原38号墳の石室が残骸となって露呈していたので、記録写真を撮るとともに、現状を実測した(第6図)。内部主体である横穴式石室は、写真を撮影した1962年3月17日現在では、北側にある奥壁が1石と、玄室側壁のうち、東側の最下段6石と第2段3石しか遺存していないが、それより前に実測した図では、さらに、第2段が3石と、奥壁よりの第3段が1石残っている。調査当時、遺物はまったく検出できなかった。

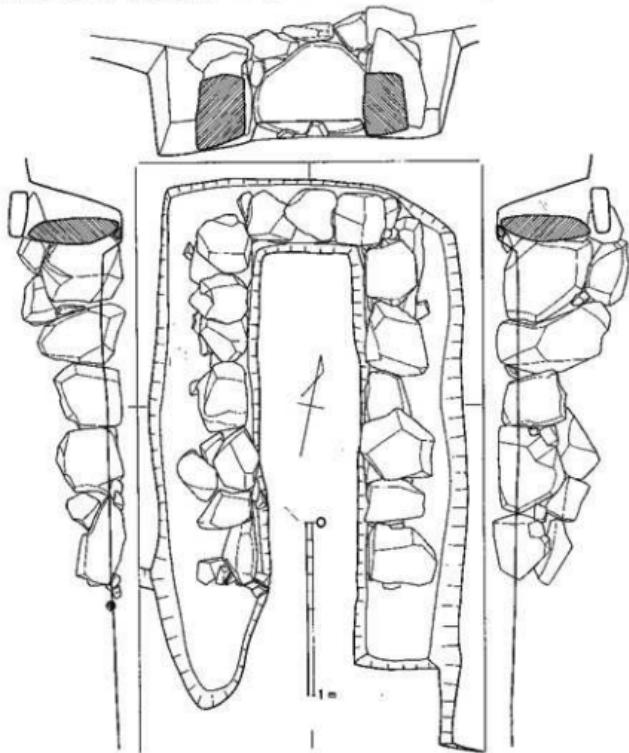
最下段は、比較的大きい丸味のある花崗岩の自然石を縦長に立て、第2段からは、比較的小さい花崗岩を横積みにしていく構築法が、桃谷型式の須恵器を出す横穴式石室を有する古墳にしばしば見られるという事実から、一応、6世紀末から7世紀初のころの築造と考えておく。側壁については、それが玄室のものであるのか、あるいは、羨道にも一部かかっているものであるのか、という点に関しては確実な根拠には乏しい。しかし、塚原において同じ類型にはいる他の横穴式石室の例から見て、東側の一部のみを残した側壁を玄室のものと推定する。このように考えると、玄室の規模は、幅0.92m以上、長さ3m以上、高さ1.3m以上ということになる。南へ開口する横穴式石室は、東へ約14°ふっている。



第6図  
塚原38号墳石室実測図 (縮尺1/6)

## 第5章 塚原85号墳の調査〔図版第5・6〕

**古墳の構造** 塚原85号墳は、山腹でも傾斜変換線に近いところに築いたものである。小形の石室の一部が露出していて、墳丘の有無は明らかでない。洪積層の地山に、長さ2.8m、幅約1.8mの範囲で、コの字形の掘り方（墓塙）を掘りこんで石室をつくっている。石室は小形であるが、横穴式石室である。なぜならば、墓塙をコ字形に掘って一方を開けて

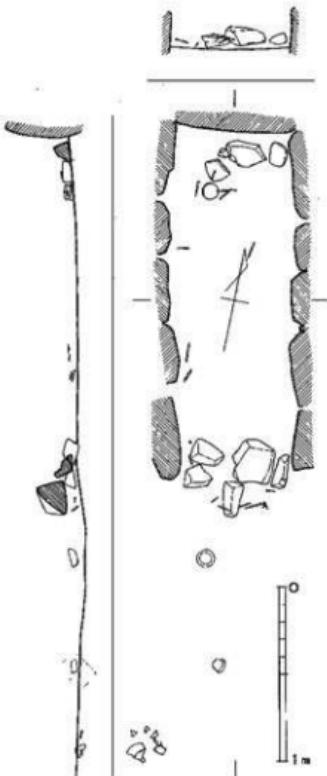


第7図 塚原85号墳石室実測図（縮尺1/6）

いること、石室側壁の構築を3面に行なっていること、ならびに、小形の石材ではあるが、最下段は縦積みに、第2段は横積みにして横穴式石室の構築法の特質を備えていることなどの理由による。

ところで、奥壁は鏡石の名にふさわしいやや大きな石材をたて、その上に比較的小さな石材を横積みにしている。東西両側壁で、最下段の縦積みの石は比較的大きいが、第2段目の石材はやや小さいものを使用している。東西両側壁は2段しか残っていない。奥壁と、東側壁の奥壁に接するところの第2段の石材の上面が揃っているので、その上に天井石を置き、したがって、木棺がようやくはある程度の高さをもつたものとも推定できる。

石室の規模は、長さ約2m、幅約0.65m、高さ約0.75mである。約10cm削り残した床面には敷石を認めなかつたが、奥壁寄りで、棺台かと思われる人頭大の河原石を数個検出した。また、入口付近には、人頭大の石が10個近く散らばつてい



第8図  
塚原85号墳遺物出土状況実測図(縮尺1/10)  
Fig. 8. Actual measurement diagram of the出土状況 (excavation status) of the remains found at the No. 85 mound in Tsurugayaoka Hachimangu Shrine.

**遺物出土状況** 遺物は、石室奥壁寄りに上師器杯1個と鉄釘4本、奥壁から70cm位のところで、西側壁と東側壁に近く鉄釘が、それぞれ1本と2本出土した。入口付近にも、鉄釘7本を認め、そこから数10cm内部にはいたった西側壁近くで銀環1個を検出した。そしてまた、入口から60cmほど内部で、西側壁に接近して、鉄刀子2本と鉄釘1本を認めた。鉄釘の位置があまり移動していないものと仮定すれば、長さ1.9mほどの木棺が、若干入口よりはみ出



第9図

塚原85号墳閉塞石・遺物出土状況

塚原85号墳閉塞石・遺物出土状況 した状態で埋納されていたことがわかる。入口近くにあった銀環をもつて頭部と推定すると、南枕に遺骸が埋葬され、したがって、鉄刀子は腰部に、土師器杯は足部に副葬されていたことと考える。石室入口の前面には、須恵器杯2個・鉢1個が破片となって散乱していた（第8図）。

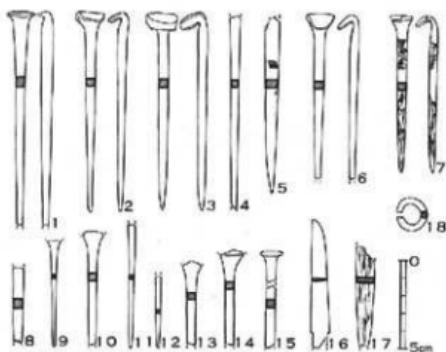
こうして見ると、石室奥壁寄りの数個の石は、

一応、棺台をめざしたものであったかもしれないが、棺台はそれに載っていないかった可能性もある。石室入口付近のまばらな石材は、その石材の下にも鉄釘があることや、石材よりもみ出して木棺の南端を考えうことなどから、石室の入口付近は土砂で覆い、その上に石材数個を載せていたとも考えることができる。

（第9図）。

**遺物** 出土した遺物は、釘15、刀子2、耳環1、須恵器3、土師器1である。

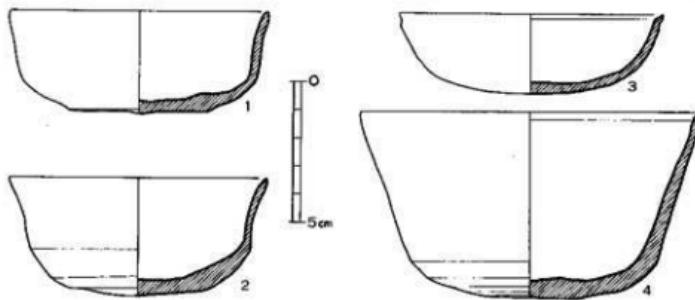
**釘**（第10図1～15）すべて鉄製である。頭部が遺存するものは、すべて頭部を薄く打ちのぼした後、一方に折り上げた形式である。ほぼ完形なもので見ると、長さ11.2cm、厚さ0.5cmのもの（3）と、長さ8.9cm、厚さ0.45cmのもの（7）がある。最大のもの（1）は長さ12.1cm以上、厚さ0.6cmを測る。小さなものの（9）では、長さ6cm強、厚さ0.2cmである。断面は長方形のもの（5）1例を除いて、他はほとんど正方形に近い形態を示す。釘の大きさには大小のものがあるが、出土位置だけからは、木棺の部分によって、釘の大小を使



第10図 塚原85号墳鐵器実測図(縮尺考)

い分けているかどうかわからない。（5）に残る木質の遺存の状況から棺材の厚さが3cm以上であることを知ることができます。

**刀子**（第10図16・17） 鉄製である。（16）は長さ6.4cm、幅1.05cm、厚さ0.2cmの刀身の両間に、長さ0.9cm以上、幅0.8cm、厚さ0.2cmの基がつく形式である。（17）



第11図 塚原85号墳土器実測図（縮尺1/2）

は、幅1cm、厚さ0.3cmの茎部のみで、現在、長さ5.6cmを残している。

**耳環（第10図8）** 銅地に銀張りの耳環である。長径1.85cm、対径1.75cmの小形である。断面は長径0.4cm強、短径0.4cm弱の梢円形をなしている。

**須恵器（第11図1・2・4）** 杯が2個と鉢が1個である。杯はともに焼成が悪く、土師質をなし、内外面とも灰白色を呈す。胎土に細砂粒をかなり多く含む。（2）の底部外面は鋸削りによる整形を行なっている。（1）の直径9.3cm、高さ3.7cm、（2）の直径9.2cm、高さ4.25cmである。鉢（4）も焼成が不良で、土師質に近い。内外面は茶褐色を呈す。胎土に砂粒をかなり含む。底部付近の外面には鋸削りが見られる。直径12.2cm、高さ6.7cmである。

**土師器（第11図3）** 杯である。ゆるやかなカーブを描く体部は、口縁端で少しき外に折れている。精選された粘土で、薄く丁寧に仕上げている。焼成は不良で、内外面茶褐色を呈する。直径9.45cm、高さ2.9cmである。

**結語** 塚原85号墳は、塚原古墳群中ではまれにみる小形の横穴式石室である。塚原85号墳の、塚原古墳群ならびに後期古墳における位置づけを行なう意味でも、手元にある資料を整理して、ここで少しく小形の石室について考えて見ようと思う。

本論に入る前に、小形石室の定義をすると、規模が小形であるということである。石室の内法の長さが2m前後、つまり、成人を葬りうる程度の、あるいは、それ以下の規模をもつ石室をさしていうことにする。

小形石室の場合、石室が露出していることが多く、墳丘の有無はよくわからない。しかし、石室を被覆するだけでもある程度の墳丘状を呈することは自然である。堅穴式石室2基を有

する奈良県櫻原市川西町新沢千塚第187号墳<sup>①</sup>は、径20m近いことが推定される。また、奈良県大和郡山市小泉町狐塚古墳は、直径21~23mの円墳であって、中央に大形の横穴式石室をもち、同じ墳丘内に、小形横穴式石室と円筒棺をもっている。和歌山市岩橋花山第10号墳の場合も、前方後円墳のくびれ部にある。大形の墳丘に複数の小形石室をもつか、あるいは、それらが中心部の埋葬主体に対して付属的・付随的にあるという意味で、むしろ、これらの例は特殊なわけである。小形石室そのものの墳丘としては、奈良県北葛城郡広陵町大塚黒石山古墳の直径約5mの円墳、石川県七尾市崎山町上三室りきの宮古墳の直径約4mの墳丘<sup>②</sup>、そして、新潟県中頸城郡高士村大字南方小字塚田第1号古墳の8m以上の墳丘などの実例から推定される規模の墳丘をもったことが考えられる。

次に、石室の構造についてである。塚原85号墳は、前述のような小形の横穴式石室である。したがって、それに先だつ墓塚もコの字形に掘られている。一方また、堅穴式石室もある。堅穴式石室の場合、4号は主として石材を横積みにしている。天井石の状況については、小形横穴式石室において、塚原85号墳で推定したように、石材で架構する場合の実例は、奈良県狐塚古墳<sup>③</sup>、奈良県御所市梅羅第1号墳<sup>④</sup>、奈良県生駒郡平群村中背塚などにおいて認めることができる。小形堅穴式石室でも天井石の遺存している例は、奈良県新沢千塚第187号墳や、和歌山市花山第10号墳<sup>⑤</sup>にある。熊本県球磨郡相良村大字柳瀬吉の尾古墳群のように、石室内に、木棺が置かれ、あるいは、木の蓋があり、その上に直接蓋石を並べたような例は珍しい。小形横穴式石室の場合、閉塞はどうなっているだろうか。塚原85号墳の場合、さきに、石室の入口付近は土砂で覆い、その上に石材数個を載せていたと推定したが、兵庫県宝塚市雲雀ヶ丘古墳群でも、閉塞土の上に、閉塞石を塊状にのせたと考えられている。閉塞石が遺存している例は少ないが、兵庫県加古川市西条古墳群のあるものでは、奥壁は石材を縦にして使い、両側壁は割石を小口積にし、そして、閉塞は小口積にしている。また、箱式石棺に類似する小形の横穴式石室ではあるが、熊本県吉の尾古墳群は、「入口の両側に柱状のやや高めの袖石をたて、その外側に、あたかも表門閉塞石のごとく板石をたてかけたもの」である。これらの小形石室の内部に木棺があったのか、それとも、遺骸を直葬されたのであろうか。塚原85号墳では、鉄釘の検出状況から木棺の存在は明らかである。奈良県梅羅第1号墳の小形横穴式石室の四隅に、木片の銷着した鉄釘が残存した。同じく、鉄釘が出て木棺の埋納が考えられるのは、奈良県黒石山古墳において認められる。

小形石室といつても、出土遺物については、現在、管見にふれた小形石室の大半から、かなり豊富な遺物を見いだす。耳環や玉類の装身具ばかりでなく、大刀・鎌などの武器や、須

患器・土師器などの容器の副葬が目立つ。とくに、石川県りきの宮古墳の場合、石室内から、ガラス小玉・ガラス玉・貝製小玉・刀子片・須恵器小片・朱塊などの遺物を発見し、さらに、石室外の前庭部ともいべきところから、須恵器（碗・壺瓶）・石製紡錘車・碧玉製管玉・土製丸玉が一個所に集まつた状況で出土している。この点は、塚原85号墳の石室外前面で認められた須恵器（杯・鉢）の検出とともに、興味深い出土状況である。

小形石室の被葬者については、小形であるゆえに、小児用という感を与えがちである。なるほど、奈良県孤塚古墳のように、 $1.05 \times 0.34$ m の小形石室の中から、小児の歯が検出されたことにより、小児埋葬用のものもあることは確かである。しかし、長さ 2m 前後のものについては、奈良県橿羅第1号墳のように、長さ 1.98m 、幅 0.6~0.65m の小形石室から、老年男子の人骨が出たことによって、成人用であることも明らかである。ところが、奈良県黒石山古墳では、長さ 2.01m 、幅 0.54m の小形石室から、熟年男性 1 、壮年女性 1 、若年 1 の合計 3 体の人骨の出土によって、成人・若年の区別なく、単婚家族かとも推定される入数の遺骸を合葬したようなものもあって、單に、石室の規模だけからは、被葬者の年令層を限定できない複雑な状態を示している。

小形石室の年代に関しては、5世紀後半から6世紀初頭にわたって行なわれたと考える。熊本県吉の尾古墳群がもっとも古い例として知られる。畿内では、奈良県の黒石山古墳・橿羅第1号墳・大和高田市大谷古屋敷古墳など6世紀後半に比定される。また、塚原85号墳や兵庫県雲雀ヶ丘古墳群のように、7世紀前半のものもある。したがって、6世紀の後半から7世紀の前半にかけて、つまり、畿内では、いわゆる群集墳の時期に、主として行なわれていることがわかるのである。

これに関連して、小形石室の分布状況を見ると、塚原85号墳・大阪府柏原市高井田平尾山・奈良県新沢千塚第187号墳・兵庫県西条古墳群61号墳のように、いわゆる群集墳のなかに、小形石室がまれに点在する場合、熊本県吉の尾古墳群・兵庫県雲雀ヶ丘古墳群・静岡県浜名郡赤佐村於呂古墳群のように、小形石室からなる数基から20数基にいたる群集墳を構成する場合、そして、奈良県黒石山古墳・古屋敷古墳のように、比較的独立的に散在する場合などがある。さらに、人形の同一墳丘の中に、中心的な主体部とは別に、付随的に埋葬されている和歌山市花山第10号墳（前方後円墳）や奈良県孤塚古墳（円墳）のような事例も認める。

こうして見てくると、報告された実例が少ないとはいっても、小形石室のもつ意味も、古墳時代後期の階級構成の多様性、ならびに、後期の地域性の複雑さを示唆する。こんごの類例の増加を期待し、また、より詳細な分析の必要性を痛感する。

- 注 ① 綱千善教「橋原市川西町新沢子塚第185号、186号、187号古墳」（『奈良県文化財調査報告（埋蔵文化財編）』第2集、P.79、1958）。
- ② 伊達宗泰「小泉孤塚・大塚古墳」（『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第23冊、P.6、1966）。
- ③ 瑪廣P.6、植田法彦・武部吉宏・中尾憲市「花山古墳第10号、11号墳」P.6、1964。
- ④ 綱千善教「北葛城郡広陵町大塚黒石山古墳」（『奈良県文化財調査報告（埋蔵文化財編）』第2集、P.72、1958）。
- ⑤ 後藤守一・大塚初重・橋本澄夫「能登高木森古墳」1960。
- ⑥ 桜井清彦・小松芳男・山田賢吾「新潟県高士村塚田第1号墳調査報告」（『古代』第33号、P.15、1954）。
- ⑦ 注②P.6。
- ⑧ 綱千善教「御所市柳縄大正池南第1号墳、第2号墳及び火葬墓」（『奈良県文化財調査報告（埋蔵文化財編）』第2集、P.65、1958）。
- ⑨ 平群村史編集委員会「平群村史」PP.360～361、1959。
- ⑩ 注①P.79。
- ⑪ 注③P.6。
- ⑫ 山田良三・石部正志「人吉盆地の古墳文化—熊本県吉の尾古墳群調査報告」（『古代学研究』第20号、P.12、1959）。
- ⑬ 石野博信「宝冢市雲雀ヶ丘古墳群の調査」（『日本考古学協会昭和39年度大会研究発表要旨』P.14、1964）。
- ⑭ 西条古墳群発掘調査団「西条古墳群調査略報」P.7、1964。
- ⑮ 注⑫P.11。
- ⑯ 注⑬P.65。
- ⑰ 注④P.73。
- ⑱ 注⑤付録P.11～12。
- ⑲ 注②P.6。
- ⑳ 注⑧P.65。
- ㉑ 注④P.73。
- ㉒ 綱千善教「大和高田市大谷古屋敷古墳」（『奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報』第15輯、P.6、1962）。

- ② 『大阪府史蹟名勝天然紀念物調査報告』第5輯、図版第85、1934。
- ③ 下津谷達男・高柳智「静岡県浜名郡赤佐村於呂所在の二古墳とその提起する問題」（『国学院雑誌』第59巻第3号、P. 36、1958）。

## 高槻市文化財調査報告書

- 第1冊 塚脇古墳群（西谷正著） 1965年3月
- 第2冊 紅葉山及岡本山東地区遺跡の調査（西谷正著） 1966年3月
- 第3冊 弁天山古墳群の調査（堅田直・原口正三・西谷正・田代克己・北野耕平共著） 1967年3月
- 第4冊 塚原古墳群の研究(I)（西谷正著） 1968年3月

高槻市文化財調査報告書 第4冊

# 塚原古墳群の研究(I)

—塚原37・38・85号墳調査報告—

1968年3月発行

大阪府高槻市教育委員会

印 刷

双 葉 工 房

大阪市旭区生江町1-125

電話(922) 代表 2831



航空写真



(1) 塚原古墳群の西方からの遠景



(2) 塚原古墳群の東南方からの遠景



(1) 入口から見た石室全景



(2) 奥壁から見た石室全景



(1) 塚原38号墳の位置



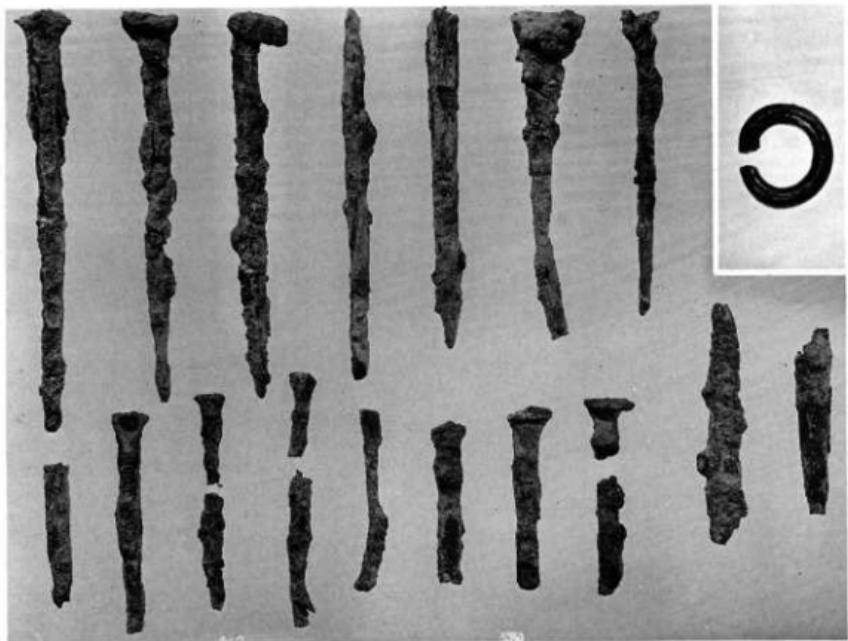
(2) 石室全景



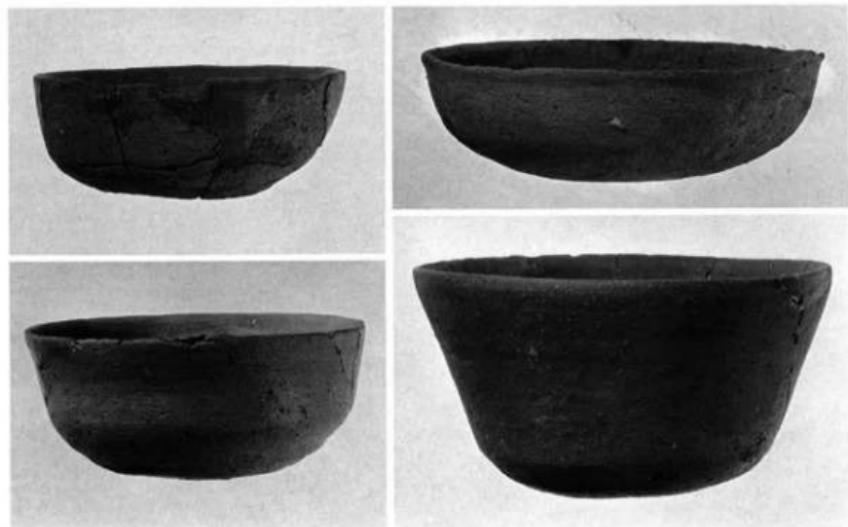
(1) 入口から見た石室全景



(2) 墓壁から見た石室全景



(1) 鉄釘・鉄刀子・銀環



(2) 須恵器・土師器